

## ミュージアム研究員紹介

### 山田和芳准教授

山田和芳



湖沼コアリングのフィールドワーク風景  
(2009年2月フィンランドにて 筆者は左から2人目)

ふじのくに地球環境史ミュージアムに勤めることになりました山田和芳と申します。今回、私の紹介を兼ねまして、これまでの活動内容と、描きたいミュージアム像について述べます。

大学では地理学を専攻しました。古気候学研究に取り組み、湖沼や海域の堆積物を採取して、化学分析や微化石観察等を通じて、第四紀気候変動の復元とそのメカニズムの解明に取り組んできました。そのような研究の中で、急激な気候変化、地震津波や台風などといった自然現象が毎日のようにトップニュースとして報じられることに、自然環境は私たちの生活社会を決定づける一要因になっていると強く感じるようになりました。そして、過去から現在にわたり、変化する自然環境に対して、人間活動や社会経済は、どの程度の影響を受けたり、与えたりするのか、この両者の関係性を精緻に知りたいと思うようになりました。

その実現のためには、過去の自然環境を人間の歴史と同じ時間スケールで議論できる“時空の鍵”が必要でした。そして、ようやく湖底に溜まる「年縞」にたどり着きました。これは1年で1セットの縞が形成される地層で、「土の年輪」として喩えられます。年縞の縞を数えることで、地層が形成された暦年がわかります。



“時空の鍵”となる年縞堆積物  
バーコード状の明暗縞一本が一年を示す

そして、地層中に含まれる微化石や化学成分から当時の自然環境を知ることができます。これによって、歴史年表のように1年単位で自然環境の移り変わりが明らかになり、そこから社会との関連性を論じることが可能になりました。

これまでの研究では、渤海国の滅亡と長白山（白頭山）の噴火は無関係であること、マヤ文明の滅亡には人為的な大規模森林破壊がその背景にあったことが判明しました。

今後ミュージアムでは、自然のロマンを感じるだけでなく、社会的使命も果たすような「未来を考える」自然系博物館という世界初のコンセプトのもと、人と自然の関係を論じる環境史研究を中心に活動していきたいと思っています。そこには、未来へ持続的な地球環境を守っていくためには、足元を正しく理解すること、つまり地域の自然史研究が根幹となり、その基盤となる標本の収集保管や、未来を担う子供たちへの環境リテラシー教育こそが重要であると感じています。これまで静岡県を愛し、残し、そして守ってきたNPO 静岡県自然史博物館ネットワークの皆さまから、多くのことを学ばせていただきながら、ミュージアムを魅力あるものにしていきたいと思っています。